

一橋大学 国立キャンパス

緑の回廊



Let's Green & Clean
一橋植樹会



目次

■ 特別寄稿	一橋と公孫樹 田崎宣義名誉教授	1
■ 緑の変遷	昭和30年代：昭和40年代：平成20年代	2
■ キャンパスの秀景	1. 送迎の森	4
	2. イチョウ並木	5
	3. 正門奥の赤松	6
	4. 癒しの森	7
	5. 錦秋の職員集会所	8
	6. 西プラザ横の緑のスペース	9
	7. 西プラザ前の西洋庭園	10
	8. 巨木と銘木の空間	11
	9. 寒椿の衝立	12
	10. ススキのゾーン・秋の七草	13
	11. 植樹会記念植樹コーナー	14
	12. 辛夷の巨木	15
	13. 硬式野球場西奥の桜並木	16
	14. 哲学の道	17
	15. ひょうたん池周辺	18
	16. 経済研究所周辺の雑木林	19
	17. 矢野二郎銅像周辺	20
	18. 生きた化石	21
	19. 図書館前主庭園	22
	20. 東キャンパス丸池周辺	23
■ 先輩の贈り物	1. 明治、大正、昭和	24
	2. 特別寄稿 小平地区のレバノン杉とコブシ (中村敬太郎)	25
■ 特別寄稿	1. キャンパスと野鳥 (藤元晶子)	26
	2. 記念植樹 普賢象とレスター・R・ブラウン博士 (國持重明)	28
■ 編集後記		29
■ キャンパスマップ		30



表紙説明

表紙は兼松講堂です。兼松(株)創業者兼松房次郎氏の13回忌の記念事業として兼松商店から寄贈された建築物(昭和2年・1927年竣工)です。ロマネスク様式の建物で国の登録有形文化財に選ばれています。

[特別寄稿] 一橋と公孫樹 田崎 宣義 名誉教授



公孫樹は大学のシンボル・ツリーです。都や東大は戦後ですが、一橋は戦前からです。商大柔道部の徽章は公孫樹の葉に「柔」、消費組合は「CO-OP」で、公孫樹で「商大」を表しています。



柔道部の徽章



消費組合の徽章 CO-OP

『一橋歌集』には一橋会歌「長煙遠く」をはじめ公孫樹の登場する歌が数多くあります。

1930年の『如水会々報』福田徳三君追悼号の如水会弔辞には「一橋学園近く東京西郊に移らんとし、物として一橋の象徴たりし大銀杏樹の運命同人の話頭に上る時、人として学園の表徴たりし君既に亡し」とありますが、この「大銀杏樹」がシンボル・ツリーの始まりです。神田一ツ橋時代には、始業と終業を告げる「自由の鐘」の隣にそびえ、「聖樹」と仰がれていました。

国立移転時に神田の樹木の一部は国立に移され、OBも年次会ごとに移転記念樹を寄付しました。しかし商大のシンボル大公孫樹は行き先がなかなか決まらず、最終的には一橋講堂脇に移されました。国立での学園生活は公孫樹ナシで始まったのです。

国立に最初の公孫樹が植えられたのは1931年のようです。ではどれが最初の公孫樹か。これが案外の難問なのですが、候補は少なくとも2つあります。ひとつは明治38年卒の「三八会」が寄付した2本です。場所は兼松講堂と正門の間で、植樹の時期は3～5月の間です。もうひとつは大学通りの公孫樹です。現在は左右の緑地帯に1列ずつですが、初めは佐野学長直々の指揮で西側の緑地帯に2列に植えられました。こちらは国立の卒業生と一橋会の寄付で、時期は3～11月の間です。国立で最初の卒業記念植樹と思われます。

卒業記念植樹は神田一ツ橋時代の慣行でしたが、関東大震災で中断しました。それが移転を機に復活し、佐野学長の呼びかけでOBも記念樹を寄付しました。大学通りの公孫樹と緑豊かなキャンパスは先輩からのプレゼントなのです。

緑の変遷

昭和 30 年代：昭和 40 年代：平成 20 年代



昭和 30 年代



昭和 40 年代



平成 20 年代

昭和 30 年代

国立移転当時の面影が残っている昭和 30 年代初頭の西キャンパス写真と推測されます。経済研究所（昭和 32 年竣工）、磯野研究館（昭和 38 年竣工）が写っていません。森で覆われており、緑はふんだんです。

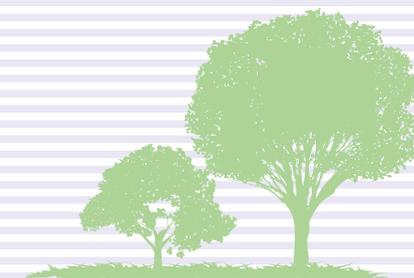
昭和 40 年代

昭和 40 年代初頭の写真です。国立の象徴であった松が枯れたこともあり、緑が貧弱になっています。植樹会の結成の背景が頷けます。植樹会は増田前学長の如水会への働きかけにより昭和 48 年（1973 年）に設立されました。

平成 20 年代

植樹会設立後およそ 40 年経過した平成 20 年代初めの写真です。国立移転当時の緑の雰囲気近づいてきました。東キャンパスの緑の回復は、目をみはるものがあります。

OB・学生・教職員が一体となった毎月 1 回の不断の整備活動と、計画的な植樹活動の成果です。





国立駅を下車し、大学に向かう時最初に迎えてくれる森です。受験生にドキドキ感を、新入生には希望を、学生には落ち着きを、卒業生には懐かしさを与えてくれる森です。この森は昔から谷保村が利用してきた里山の雑木林の遺産です。構成する樹木はコナラやアカマツです。コナラは薪炭の原料であり器具材などに利用されました。伐採したところから芽が出て成長する萌芽更新の木で植林の費用や手間が省け、まさに里山における循環型の主要木でした。アカマツは建築材、土木用材などに利用され高熱を得られる燃料でした。今はいずれも大きな木々に成長し美しい緑の景観を見せてくれます。夏の暑い日にはここに差し掛かると涼しく感じホッとする遮熱効果も、又、大学通りの喧騒を遮断する機能をも果たしています。



正門を入りやや左に曲がるイチョウ並木を抜けるといっぺんに視野が開け、兼松講堂、図書館や本館と中央庭園が一望できます。20本のイチョウ並木は昭和42年に植樹され、イチョウの間にドウダンツツジが15株植樹されていますが昭和43年に植樹されたものです。

このイチョウとドウダンツツジを植樹された先輩は、関東大震災後、神田一ツ橋から国立へ移り、国立の新しいキャンパスで初めの3年間(昭和3年、4年、5年)に学業を終えられた卒業生のパイオニア会の面々です。神田一ツ橋のシンボルツリーであったイチョウも国立に引き継がれました。

秋にはイチョウの黄葉をさらに盛り上げようと紅にそまるドウダンツツジも加わり、より素晴らしいものになりました。



イチヨウ並木をすすむと、目の前に4本の大きな赤松が、国立移転の立役者でありキャンパスの生みの親である、佐野善作学長の銅像を守るように聳えています。

松は日本では常磐木としてめでたいものと考えられ、神の降臨する神聖な木として崇められ、節操、長寿を象徴する木ともされてきました。ローマ神話の商業の神であるマーキュリーも、この松をすみかにしているかもしれません。

国立キャンパスは武蔵野の雑木林を開発して創られました。クヌギやコナラなどの落葉広葉樹に常緑樹の赤松が混じる珍しい雑木林だったそうです。ここにある赤松は学校の熱意ある保護対策で、今も見事な樹勢を見せています。



西キャンパス正門の大学通り沿いに、外部の騒音を遮断する役を担って小さな森が形成されています。写真の建物は、昭和6年3月竣工の木造建築です。「門衛所」として利用されましたが、今は使われていません。キャンパス最古の木造建築で文化庁の登録有形文化財に指定されています。

この森は国立移転当時からあった在来樹木（アカマツ、コナラ）と先輩からの贈り物（ヒマラヤスギ、シイノキ、クスノキ）で構成されています。

森の正門側の好間川石に「卒業50周年 四日会の森」と彫られた碑があります。大正4年卒業生（四日会）が卒業50年の昭和40年に植樹したものです。森の北側に、イチヨウ、ドウウダンツツジ、中央にモチノキ、南側にヒマラヤスギ等、先輩からの贈り物が沢山植樹されています。



キャンパスで秋の粧いの見事なスポットは、正門のイチョウ並木と、ここ職員集会所周辺です。職員集会所は昭和9年に建設された木造建築です。写真は玄関前に通じる道沿いの錦秋の景色です。ここでも先輩の贈り物が光り輝いています。黄色のイチョウは大正7年卒業生40周年記念。右手前の赤いドウダンツツジは大正11年卒業生の寄贈。イロハモミジも左の奥に見られます。

これらの木々は、植樹の時期が異なりながら、明らかに秋の景色を基本に配置され植樹されたものと思われます。

玄関左側に「無石園」と彫られた石碑があります。庭全体には石はなく、ツバキ、モッコク、イヌツゲ、サツキなどの庭木で造園されています。



西プラザ前の広場と図書館南側の境目に、大きな緑のスペースがあります。ここにはハナミズキ3本が植樹されています。日露戦争で日本に友好的であった米国へお礼としてサクラを贈りましたが、その返礼として米国から日本に贈られたのがハナミズキでした。右端(赤色)は、町田家から贈られたものです。町田家は3代にわたる大学OBで、新潟県妙高山麓に山荘を寄贈されました。山荘は大学関係者や学生に登山やスキーで永年利用されてきましたが、残念なことに閉鎖されました。その山荘の思い出にとハナミズキを贈って頂いたものです。左端は(赤色)、三石会(石ゼミ)平成20年の植樹です。中央の白いハナミズキは大学が植樹したものです。その左側に見える五葉松は市原ゼミにより昭和60年に植樹されたものです。曾ての学生生活の懐かしい思い出の縁(よすが)が残る一角です。

7 西プラザ前の西洋庭園



西プラザ前には西洋庭園があります。この庭園デザインに対して国土交通大臣の「緑のデザイン賞」が贈られています。

西洋庭園の特徴は左右対称です。中心点が真ん中のケヤキです。ケヤキを取り囲んで4本のコブシ(3~5月・白花)があります。

春の新入生を迎えるころにこの庭園は輝きます。まず、4本のコブシが白い花を咲かせます。ついで、南側のアベリア(1mほどの花木、白い小花・5~11月)、レンギョウ(1mほどで、黄色の花木・3~4月)が続きます。

庭に設置されているベンチは学生の情報交換、授業の準備などに利用されています。

巨木と銘木の空間

8



西プラザ食堂から眺める空間は、陸上競技場、硬式野球場、ひょうたん池に通じる大きなものです。この空間にふさわしい大きな木が聳えています。日本の代表的樹木2種、中国原産の樹木2本、明治に渡来した樹木2種です。

日本の代表的な樹木はケヤキとクスノキです。ケヤキは関東地方の代表的樹木で、江戸幕府は寺院や橋などの大型建築のため、農民に植栽を奨励しました。クスノキは南西日本の樹木です。腐朽し難く大木となり、丸木舟や厳島の大鳥居にも利用されています。

イチヨウは中国原産で室町時代に渡来しましたが日本人に愛され、母校でも大学を象徴する木になっています。キャンパスには多数植樹され、秋には市民がギンナンを拾う姿も見られます。

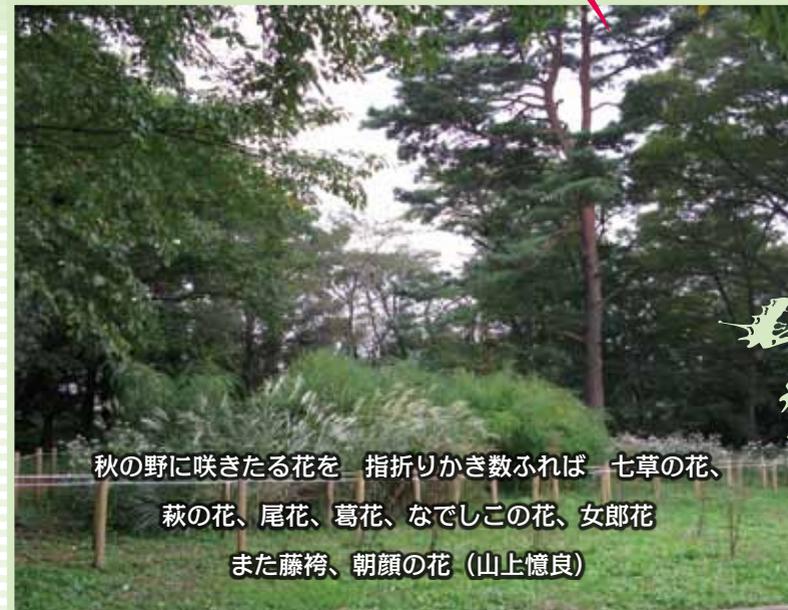
明治に渡来した樹木は写真のプラタナスとユリの木です。日本人は、外国の木に素晴らしいニックネームを付けて大事にしてきました。プラタナスには「鈴懸の木」という名を、ユリの木には、花をみて「チューリップの木」、葉をみて「ヤッコダコ」「グンバイノキ」です。観察して下さい。意味がわかります。



西キャンパスも奥まった陸上競技場東側、住宅街との境には目隠しとして沢山のタチカンツバキが壁のように植栽されています。陸上競技場で練習に励む学生の気合いや歓声が騒音となって住宅街に迷惑を掛けまいとする気配りのためでもあります。

初冬に開花し、2月まで咲き続け、枯れ草色一色に染まる周囲の風景に美しいアクセントをつけてくれる功労者と言えます。花の時期は、小鳥が群れをなしてここを訪れます。

花が散る頃は、桜吹雪ならぬ椿吹雪になり、地面一帯に花びらが敷かれます。防寒対策をして、花と小鳥を楽しみませんか。



秋の野に咲きたる花を 指折りかき数ふれば 七草の花、
萩の花、尾花、葛花、なでしこの花、女郎花
また藤袴、朝顔の花 (山上憶良)

西キャンパスの最南端、陸上競技場の南東の角に、秋の七草ゾーンがあります。大学が国立キャンパスの自然の保全を企図し、外部の専門家の協力を得て平成16年11月に承認・制定された「一橋大学国立キャンパス緑地基本計画」に盛り込まれた「ススキ草原」が一橋植樹会の作業によって完成し、以後定期的な手入れを受けながら維持されています。七草のうち、ススキとハギは、九州久住高原に分布する草を遠く国立まで運んで移植したものです。西キャンパス南西部の奥に「白い萩」に代表される関東地方の七草を植えた「第二ススキゾーン」もあります。

万葉の歌人、山上憶良に詠まれた秋の七草も自然の野原で見つけるのは、非常に難しくなっています。花の時期が違う事と、開発や乱獲等で、絶滅危惧種になっている種もあります。キャンパス内で七草が見られることは、誇ってよいことだと思います。





西キャンパスの南西のコーナー（如意団部室南側）は、通りを隔てて住宅街と直接向き合っています。大学通りに面した地域は、大きな防音林があり、陸上競技場東側は縦列の寒椿が潤いを生み出していますが、この地域は、非常に殺風景なコーナーでした。

植樹会が過去三回に亘り植樹をして春と秋には潤いの感じられるコーナーになってきました。

植樹会の植樹内容

平成 19 年 3 月 フゲンゾウ（サトザクラの一種）3 本とカンツバキ 3 本
 平成 20 年 3 月 フゲンゾウ 3 本とウバメガシ（ブナ科の常緑広葉樹）3 本
 平成 22 年 3 月 ギョウイコウ（サトザクラの一種・緑の花）1 本



国立キャンパスには幹の周囲が 3 m を超える巨木は 15 本程あります。ほとんどが国立移転後に植樹された樹木です。移転前から生えていた樹木の巨木は、本館東側のアカマツと西キャンパスの南西にあるこのコブシです。2 本の株立ちになっていますが、それぞれが 2 m を超えるので合計 4 m を超えることになります。コブシとしては関東でも指折りの巨木と推測されます。

早春に枝一杯に白い花を咲かせます。その姿は桜に似ており、昔の農民はこの花が咲くころ田打ち（稲を植える前に田圃を耕す作業）を始めたので「田打ち桜」とも呼ばれています。花後の実が人間の拳に似ているところから、コブシの名がついたそうです。

枝を折るとよい香りがします。アイヌはこの樹を「オマウクニシ」と呼んだそうです。「良い匂いのする木」という意味です。



花見は大学通りばかりではありません。キャンパス内にも豪華な桜を
 観賞しながら通り抜けできる桜並木があります。それがこの西キャンパ
 ス西奥のスポットです。恐らくは殆どの学生が在学中足を踏み入れず、
 この隠れた名所を観賞せずに卒業して行くのではないのでしょうか？

植えられている桜は、野生種（ヤマザクラ、オオシマザクラ等）と園
 芸品種であるサトザクラ（フゲンゾウ、カンザン、ソメイヨシノ等）で
 す。フゲンゾウは、室町時代からの桜で、大きなメシベが普賢菩薩の乗
 る象の牙に似ていることからついた名です。

ちなみにこの並木は、「植樹のための寄付をする植樹会」から「キャン
 パスの自然保全のため作業する植樹会」への改革を実現し、その直後
 に急逝された第五代会長岸田登氏を記念して「岸田ロード」と命名され
 ています。



西キャンパスのひょうたん池の奥に哲学の故太田可夫教授がキャンパ
 スと官舎の行き帰りに散策したと言い伝えられる小径が在ります。太
 田先生を慕う門下生が後年「太田先生をしのぶ会」を結成し、昭和 54
 年（1979年）に「つどいの森一式」を造成していただきました。雑木
 林の一角に石畳のサークルとベンチ、それを桜の木々が取り囲んでいま
 す。雑木林の主役であるクヌギも沢山あります。植樹会では、近くにあ
 るひょうたん池からこの森に至る径にアジサイを植えて、「アジサイの
 小径」を作りました。

アルトハイデルベルグの哲学者の道や、京大の哲学者・西田幾多郎が
 散策しながら思索に耽ったといわれる「哲学の道」のようなメジャー・
 スポットではありませんが、吹き抜ける風を感じながらひととき思索に
 耽っては如何でしょうか。



磯野研究館南にある人工の池「ひょうたん池」には、水辺を含む広い空間が存在します。ここにも多くの先輩方の贈り物が、たくさん植えられています。

池の北側は、ツゲ、クスノキ、西側はサワラ、南側はカンツバキ、ヤブツバキ、ユリノキ、東側はイチヨウ、クスノキ等です。日当たりがよいので、樹木の成長もよいのですが、永年手入れを怠り放置したこともあり、一時期水面が見えなくなるほど木々が生き茂りました。反面、国立の気候が合わずに消えて行ったシラカバ(真壁喜三郎氏寄贈)やフェニックス(小宮山喜之助寄贈)のような例もありました。平成15年7月、植樹会がキャンパスの自然保全のためボランティア作業に取り組み始めて伸び放題になり荒れたキャンパスの手入れに本格的に着手しました。

ひょうたん池もその一つで悪戦苦闘の末、現在のように見違えるほど見通しのよい場所となり、毎冬、冬鳥のマガモが飛来するようになりました。留鳥であるカルガモも加わり池は賑やかになります。



キャンパスの森は、大学移転以前に存在していた武蔵野の雑木林と移転後に先輩方の寄贈された樹林によって構成されています。移転後の森は、兼松講堂、図書館、本館などに囲まれた空間に存在しています。この樹林は国立では自生しなかったイチヨウ、ヒマラヤスギ、クスノキなどの樹木で構成されています。

移転以前の森は、大学通りの騒音を遮る防音林と、西キャンパスの北西側(ホッケー競技場、経済研究所周辺)に存在しています。移転以前の森の構成樹木は、コナラ、クヌギ、アカマツ、エゴノキ、イヌザクラなどです。その多くは、萌芽更新できるものです。燃料等に樹木を伐採したあと、農民はわざわざ苗を育てて樹を植える余裕はありません。放置しても自然に生育する樹木を植えて新しい森(いわゆる雑木林)を造成しました。



薩摩藩士の森有礼は、幕末慶応元年(1865年)英国に密航・留学、その後米国を経て帰国、商業教育の重要性を痛感しました。明治8年(1875年)、銀座尾張町に商法講習所を設立しました。その後外交官となり講習所の運営から身を引きましたが、明治18年(1895年)に初代文部大臣として、講習所を文部省管轄にしました。

矢野二郎は森有礼不在の間運営に携わりました。管轄が東京市や農商務省になったりで財政的にも厳しかったのですが、渋沢栄一らの協力を仰いだり私財を投じるなどで、講習所を守りました。

この功績に感謝し、兼松講堂の西側に矢野二郎の全身立像が建立されました。矢野二郎の顔は図書館に向いています。その視線と図書館の間に明治18年卒先輩の記念植樹イチョウの巨樹(幹周320cm)が聳えています。



兼松講堂はイチョウに囲まれています。東側に明治38年卒の植樹が2本あり、西側には明治36年と昭和5年の植樹があります。イチョウも大木ですが、それを凌ぐ巨木が講堂西側に聳えています。メタセコイアです。このエリアの主のような趣があります。秋にイチョウは黄色く、メタセコイアは焦げ茶色になり、その対照が見事です。

メタセコイアは大阪市大の三木茂博士が太平洋戦争が始まった昭和16年に化石から発見・発表しました。既に絶滅した樹木と考えられていましたが、戦争が終わってから、この樹が中国で生存していることが分かりました。当時、「生きた化石」と話題になったそうです。日本は米国からこの樹を譲られ、各地に植えられています。



西に図書館、南に本館、東に佐野善作像、北に兼松講堂に囲まれた空間です。開放的で明るいエリアなので、多くの先輩方の記念植樹があります。

北側、矢野二郎像と向かい合うように、創立 100 周年を記念してニューヨーク支部から寄贈されたキンモクセイがあります。秋には、芳香を周囲に漂わせます。兼松講堂の対面には昭和 18 年卒業生の卒業 25 年記念の白梅が植樹され、初春に馥郁たる香りを漂わせます。この年次の先輩は学徒出陣の学年です。

東に国立移転を指導した佐野善作初代東京商大学長の像があります。像の東側に学長を守るように大正 6 年卒業生の記念植樹マテバシイ（卒業 45 年記念）が 3 本植樹されています。

南、池と本館の間に、井之頭支部のハナミズキが植樹されています。西の図書館前と、東の佐野像の背後に国立の象徴であるある赤松が聳えています。



東キャンパスの東本館と東 1 号館の間にある丸池まわりは、日当たりもよく様々な樹木が植えられています。池の北東側には 2 本の赤松が聳えています。南東側から 1 号館の前にかけて背の低いアカマツが 4 本程植えられています。これは多行松というアカマツの園芸種です。公園や庭園によく植えられています。夏にひときわ目を引くのが中央のサルスベリです。兼松講堂前に白梅を植樹した昭和 18 年卒の先輩がたの 2 本目の植樹です。

中央で太く聳えるのは兼松講堂西側にもあるメタセコイア（庭石の右側）です。ここには 2 本あります。写真の庭石の右側に見えるのが巨木の 1 本で、昭和 30 年代から 40 年代に来るべき情報革命を予見し「サイバネティクスと情報科学」に取り組んだ杉田元宣教授の退官記念にゼミテンと共に植樹し、「サイバネの木」と名付けられたそうです。この記念碑的巨木が、キャンパスに 3 本もあることは誇ってよいことだと思います。



明治の先輩
(明治 18 年卒イチョウ)

明治の先輩

明治 18 年 (1885 年) の卒業生の贈り物です。当時、東京商業学校校長であった矢野二郎先生の記念庭園の脇に聳える巨木です。根元の石碑に「明治 18 年」の刻印があります。



大正の先輩
(大正四年卒 スダジイ)

大正の先輩

大正 4 年 (1915 年) 卒業の 4 日会の記念植樹です。卒業年度 1915 年の下 2 桁の 15 を取り 150 本の植樹をしました。今でもスダジイ、クスノキ、タイサンボク、ヤマザクラと沢山見られます。



昭和の先輩
(昭和 18 年卒 白梅)

昭和の先輩

昭和 18 年 (1943 年) 卒業の専養会の植樹です。学徒出陣の年です。学問の神様、天神様の御神木の白梅です。学問を放棄せざるを得なかった先輩の無念さが伝わって来ます。佐野書院の戦没学友の碑に 816 柱が刻まれており、そのうち学徒出陣による戦没者は 90 柱を数えます。

小平地区のレバノン杉とコブシ



心に、母校千年万年発展への願いを込めて

昭和 25 年会は、2000 年、卒業 50 周年を記念して、小平の地に、「レバノンスギ」3 株と「こぶし」1 株を植樹しました。

レバノンスギは、われわれが母校千年、万年の発展を願う印として、また、友情と言う花言葉に飾られたこぶしは、同期の仲間の絆を思い描いて、選んだものです。わが国への到来は明治期と言われるレバノンスギについて一言。

レバノンの世界遺産「カディシャ渓谷と神の杉の森」に、数千年の歴史を背負って、いまでも芳香を放っているレバノンスギは、マツ科ヒマラヤスギ属の針葉樹で、和名は「香柏」、学名は「*Cedrus libani*」。古代フェニキアの栄えた地 (現在のレバノン、シリアなど) が原産地で、高さ 40 ~ 50 メートルにまで成長、中には 6000 年の樹齢に達するものもあります。

わがレバノンスギは、駐日レバノン大使の了承を得て、1955 年、「森と文明」旅行団が現地採取、日本国内で育苗、4 年の実生苗を植樹したもので、東大小石川植物園には、われわれの提供した兄弟苗が育成されています。

わが国での植栽例は少なく、東京では、新宿御苑、東大田無演習林、多摩森林科学園、ほかに京都植物園、県立高知高等商業学校 (甲子園優勝記念に植樹) 程度しかありません。

われわれの願いの結晶「レバノンスギ」「こぶし」を大事に育てて頂いている母校施設課の皆さんに感謝しております。

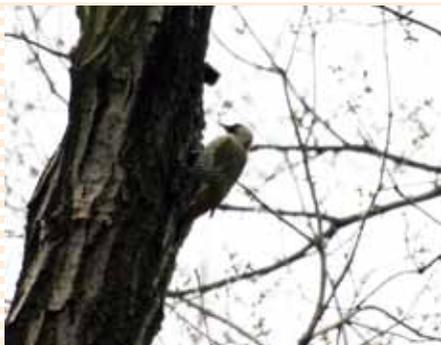
キャンパスと野鳥

私が一橋大学に在籍していた2002年4月から2013年9月までの間、キャンパス内で確認できた鳥の種は53種に及びます。その内訳は、留鳥（ある地域で一年中見られる鳥）37種、夏鳥5種、冬鳥8種、そして外来種3種です。学内の自然環境ゆえ、森や林に住む鳥がやはり大半を占めますが、少ないながらもひょうたん池などの水場があるため、カモ類やカワウ、ゴイサギと

いった水辺の鳥も観察することができました。住宅地に囲まれた立地ながら、アオゲラやエナガといった比較的緑の豊かな場所で見られる鳥が生息する点は特筆すべきでしょう。

カルガモやシジュウカラ、エナガのように学内で繁殖する鳥もいれば、ツバメのように学内での繁殖は確認できないものの餌場として利用する鳥もいます。マガモやツグミなど、毎年学内で越冬する種のみならず、アトリやトラツグミなど、その年の気候や餌の状況によっては越冬のために姿を見せる種もいます。また、キビタキやセンダイムシクイ、カワセミのように渡りや移動の際に一時的に滞在する鳥もあり、大学内の自然が多くの種の鳥に様々な利用されていることがわかります。

特に印象深かった鳥との出会いをご紹介します。2012年2月上旬のある日、冷え込みの厳しいキャンパスを、鳥を探して歩いていました。この年はとても寒く、ひょうたん池が全面凍結する日もありましたが、幸いその日は水面が見えていました。水面や岸にぼつぼつとカモが並ぶ中、ふと見慣れない鳥に気がきました。ひょうたん池に常連のカルガモやマガモに比べて明らかに小さいそのカモは、顔に緑と黄色の巴模



アオゲラ

翼の緑色（緑色は伝統的に青に含まれる）が名前の由来です。

様があったのです。「トモエガモだ！」興奮で寒さも忘れ、夢中でシャッターを押しました。

トモエガモは、環境省のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）に、東京都のレッ

ドデータブックでは絶滅危惧ⅠA類（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの）に指定されています。珍しさと雄の体色の美しさゆえ、バードウォッチャーには人気が高く、特に関東では飛来数が少ないこともあり、発見されると多くのカメラマンが押し寄せるほどです。偶発的とはいえ、このような貴重な鳥がキャンパスで越冬したことは、私にとって大変嬉しいことでした。

その一方で、近年キャンパス内の鳥に気になる兆候も表れています。外来種の存在です。ペットが逃げ出すなどして野生化した外来種は、元々そこに住んでいた種の餌や生息場所を奪ってしまうことがあります。入学当初は見ることのなかったワカケホンセイインコやソウシチョウの姿



メジロ

目の周囲に白いリング状の模様があります。鶯餅色の体色をしており、梅などの花の蜜を好むことから、「梅に鶯」のウグイスと間違われることもしばしばです。



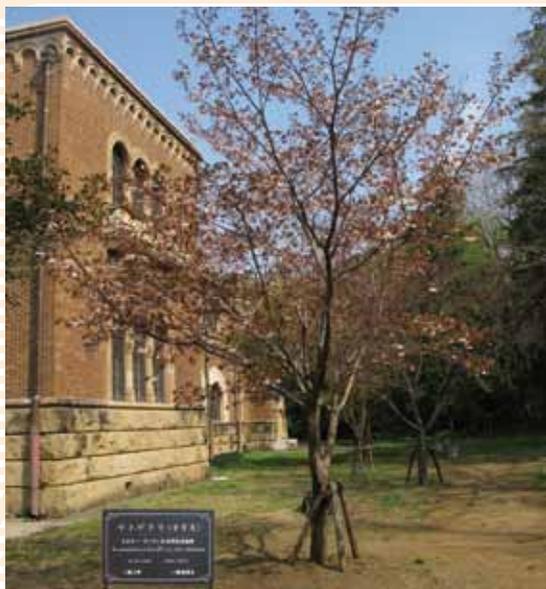
トモエガモ

雄の顔に緑、黄、白の巴状の斑紋があります。

が5年ほど前から見つかるようになり、特に後者はウグイスを駆逐する例が知られていることもあり、大変憂慮しています。今後、注視していかねばなりません。

母校の緑豊かなキャンパスが、そこに住む多くの鳥たちにとっても楽園であり続けてくれることを願ってやみません。

記念植樹 普賢象と レスター・R・ブラウン博士



レスター・R・ブラウン氏 (1934 ~) は 1970 年代から今日まで地球環境悪化の諸問題と啓蒙運動に活躍されている世界的に著名な思想家・活動家です。

2006 年 5 月 22 日、大学は、同氏を招聘し、長年にわたる研究努力と実績に対し、杉山学長 (当時) から名誉博士号を贈りました。授与式のあと行われた記念講演と「エコ・エコノミー」に関するシンポジウムは学内外の聴衆で大盛況でした。

また、大学と一橋植樹会は、フゲンゾウ (普賢象) の若木を一本用意し、兼松講堂脇に記念の植樹をお願いしました。若木はご覧の通り、順調に成長しております。

ブラウン氏によれば、卒業生・学生・教職員が一体となった環境保全活動は全世界に例がない、と植樹会を高く評価し、ご自身が入会申込書にサインしてくださいました。ブラウン氏の期待に応えて、世界に誇る一橋植樹会を目指したいと思っております。

編集 後記

昭和 40 年 (1965 年)、増田学長 (当時) のキャンパスの松枯れを食い止めたいとの一文が如水会会報に掲載され、これをきっかけに「母校への植樹」運動がスタートし、昭和 48 年 (1973 年) に一橋植樹会が設立されました。その活動が 30 年を迎えた 2003 年に、「苗木を植える植樹会から緑の環境保全を支援する植樹会」への改革を経て今日に至っています。各月の作業は、毎回およそ 80 名の参加を得て行われています。その活動の成果はこの小冊子の 2、3 ページの緑の量の拡大で確認することができます。

この緑の拡大はキャンパスのロマネスク様式の兼松講堂、図書館や昭和初期の木造建築と調和して、研究と勉学の場として穏やかで静かな景観を醸成しました。この素晴らしさを皆さんに知って貰い又後世に伝えるものとしてこの景観を小冊子一緑の 30 景に纏める作業を 2011 年の春から開始しました。この制作に大活躍されたのが当時 4 年生で植樹会学生理事小川優希さんです。就職活動、卒論準備の多忙の中、夏休みのほとんどを捧げて編集とデザインに没頭してくれました。お蔭で同年 11 月には初版として上梓できました。キャンパスの素晴らしさに気づいた方々の中にテレビ放送や映画製作関係者がおられます。2012 年には NHK の朝ドラ「うめちゃん先生」、同年封切られたアニメ映画「おおかみこどもの雨と雪」にも、キャンパスの緑と建築物が背景として使われました。

初版上梓から 3 年経ちました。生々流転、キャンパスは大きく変化しています。国立に移転して今年 85 年となります。当時開発した武蔵野の雑木林の木々も百歳を超える古木もあります。今又松枯れの被害が顕著に見られるのは、老木が故とも言われています。この変化に植樹会も、植樹を柱とした環境保全活動に転化し、「緑の 30 景」

も「緑の回廊」として生まれ変わりました。改定に際し、大学の歴史を背景にした風景 (イチョウ風景とクスノキ風景) と、地域の歴史をバックとした風景 (アカマツ風景と、コナラ・クヌギ風景) を基準に選定しなおしました。日本の象徴的景色であり、平成 25 年に「信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産に登録された富士山もキャンパスの背景として忘れてはならないものです。

(編集委員:八藤南洋、西村周一、夏目恭宏、津田正道、五島康晴、川崎勝晤、若月一郎、伊藤正秀、斉藤万純、堀田智帆、高野瑞生)



CAMPUS MAP



Let's Green & Clean
一橋植樹会

記念植樹

- ★ レスター・R・ブラウン博士 招聘講演記念
(2006年 フゲンゾウ・普賢像)
- ★ 明治の先輩 (明治18年卒 イチヨウ)
- ★ 大正の先輩 (大正4年卒 スタジイ)
- ★ 昭和の先輩 (昭和18年卒 白梅)
- ★ 小平地区 中村敬太郎氏
(昭和25年卒 レバノン杉とコブシ)

20 東キャンパス丸池周辺

至
国
立
駅

至
谷
保
駅

1 送迎の森

4 癒しの森

2 イチヨウ並木

3 正門奥の赤松

5 錦秋の職員集会所

18 生きた化石

17 矢野三郎銅像周辺

19 図書館前主庭園

7 西プラザ前の西洋庭園

6 西プラザ横の緑のスペース

9 寒椿の衝立

8 巨木と銘木の空間

10 すすきのゾーン・秋の七草

16 経済研究所周辺の雑木林

15 ひょうたん池周辺

14 哲学の道

13 硬式野球場西奥の桜並木

11 植樹会記念植樹コーナー

12 辛夷の巨木

2015年3月初版